

たかのりゅうせん
高野隆仙



▲高野隆仙画像(奥州市 高野長英記念館所蔵)

高野隆仙は、漢方医・高野隆永の長男として大間木村(現在緑区大間木)に生まれ、長じて江戸に出て、シーボルトの弟子・高野長英に師事し、長英に従って長崎へ行ったとされています。大間木村に戻ってからは、父の後を継ぎ、蘭方医として村人の診療にあたりました。

隆仙は医者であるとともに蘭学者でもあり、南画・華道・茶道・俳諧・書道等をたしなむ多才な人物でもありました。多くの文化人と交流を持つなど、地方の文化人としても活躍しました。

また、蛮社の獄によって捕えられていた師・高野長英が逃亡した際、長英の身をかかったことで投獄され、100日にも及ぶ拷問を受けましたが、決して長英の行き先は話さなかったといひます。しかし、この時の傷が癒えず、安政6年(1859)49歳で没しました。

利用案内

開館日 毎週土曜日・日曜日

(ただし、年末年始 12月28日~1月4日の間は休館)

開館時間 午前9時~午後4時30分

所在地 **さいたま市緑区大間木3-30-11**

問い合わせ先 浦和くらしの博物館民家園

電話 048(878)5025

交通案内

バス:国際興業バス

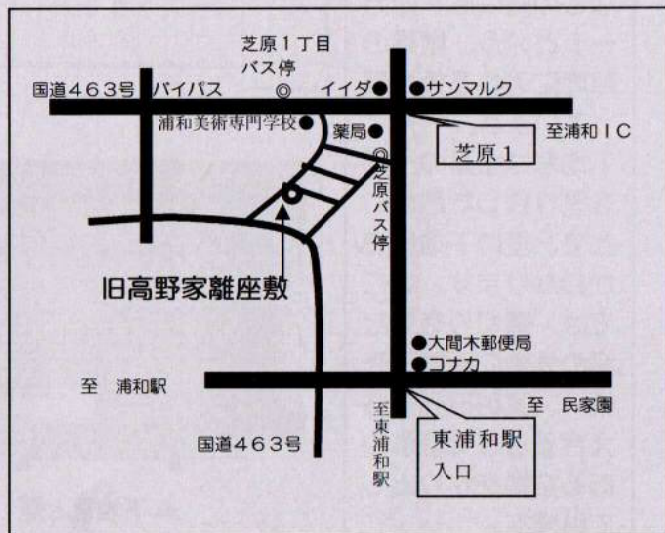
①武蔵野線東浦和駅から「馬場折返場行き」「さいたま東営業所行き」「市立病院行き」バス停『芝原』下車

②京浜東北線浦和駅から「浦和美園駅西口行き」「さいたま東営業所行き」バス停『芝原1丁目』下車

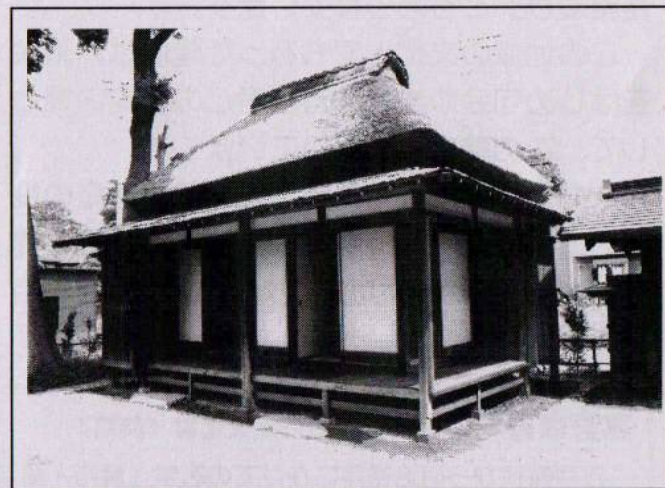
バス停より徒歩3分

徒歩:武蔵野線東浦和駅より25分

※ 駐車場はありません。



きゅうたかのけはなれざしき
旧高野家離座敷



きゅう たかの け はなれ さ しき
 旧 高野家 離座 敷

さいたま市指定文化財（建造物）

この建物は、赤山街道と呼ばれる道筋に面した旧高野家の敷地内にあったもので、江戸時代末期の蘭方医・高野隆仙が母屋の離れとして建てたものです。

昭和56年に市指定文化財となり、平成10年に市に寄贈され、平成17年度に解体修理復原工事が行われました。

茅葺寄棟の小規模な建物で、4畳半、3畳の2間からなります。主室である4畳半には茶席用の炉を切り、床の間や隅切の下地窓を設けるなど、茶室建築の手法を取り入れた「数寄屋造り」と考えられています。

この地域の文化人でもあった隆仙は、茶会をはじめ句会や当時の有識者との談笑の場として、この離座敷を用いていました。

なお、隆仙は師である高野長英が幕府の役人に追われた際、長英をこの離座敷に数日間かくまい、滞在中は家人も近づけぬほどの用心をしていたといえます。

たかの けしよせき
 高野家書籍

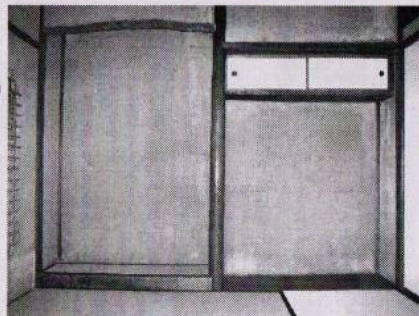
さいたま市指定文化財（典籍）

江戸時代から明治初年にかけての医学（漢方・蘭方）、文学、理学、漢籍、茶道関係など多岐にわたる書籍762点が高野家に伝わっていました。これらは一括して、さいたま市立浦和博物館に寄贈されています。

（浦和博物館 TEL・048（874）3960）

床の間 磨き丸太のトコ柱を中央に、向かって

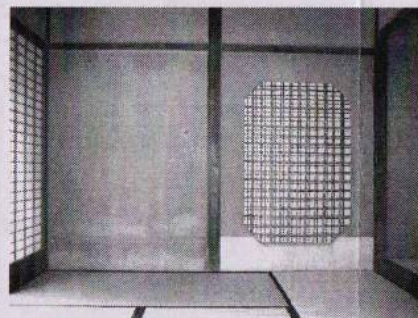
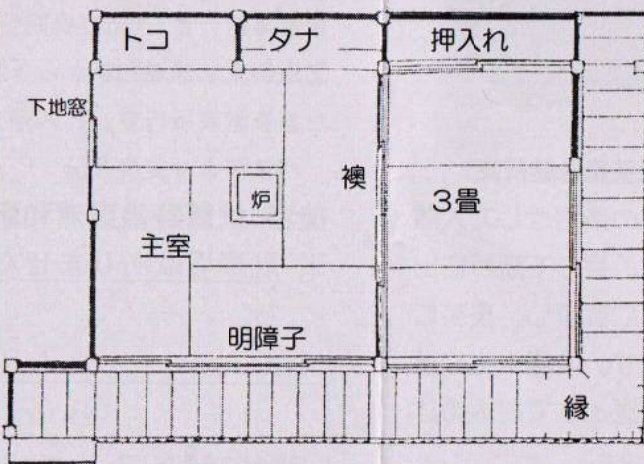
左にトコ、右にタナ（天袋付き）を配しています。トコとタナの間の壁には「狝くぐり」がつけられています。



▲トコとタナ

壁と下地窓

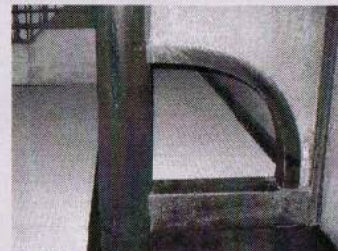
主室・3畳とも、「聚楽」と呼ばれる土壁で仕上げ、下方に「腰張り」と呼ばれる紙をはってあります。また、壁と柱などの間には「四分一」という、壁隅の隙間に入れる板が廻っています。下地窓は土壁の一部を塗り残した窓のことで、壁の下地構造がわかります。ここでは、隅切りをした窓の外側に明障子を用い、直射日光をさえぎることで陰影のある空間を作り出しています。



▲下地窓と壁

ちん
 狝くぐり

トコとタナの境の下部に開けた開口部のことで、ここでは、扇形に吹き抜けにあいています。



▲狝くぐり

下地窓からの採光をタナの床面に取り入れる工夫です。

襖

主室と3畳は、襖で仕切られています。

かつて、主室側の襖には芭蕉という植物の繊維で織った芭蕉布を貼り、下部には、壁同様、腰張りをしていました。

この建物は入口に躰口（にじりぐち）を設けず、明障子を入れて広く作られています。

また天井は高く、いわゆる「茶室」とは異なった造りをしています。

茶室建築を取り入れた「数寄屋造り」と見られ、全体的に簡潔・洗練された意匠を持っています。